

## 4 妊娠期における母子相互作用 第2報

— 母親からみた胎児の母親に対するシグナル・反応行動 —

大阪市西淀川区保健所	○江 藤 真由美 (38回生)
京都大学医療技術短期大学部	尾 崎 暢 希 (38回生)
愛媛県今治中央保健所	菊 池 恵 子 (38回生)
横浜国立市民病院	高 見 美 加 (38回生)
高知医科大学付属病院	山 下 作 実 (38回生)

### I はじめに

人生の最も初期に形成される人間関係が母子関係であり、将来の子供の発達や対人関係に影響を与えられている。この母子関係を良好に形成するためには母子の相互作用が重要で、それはすでに妊娠期から始まっている。しかし、どのような相互作用が行われているのかは明らかにされていない。従って、妊娠期の母子相互作用が明らかになればそれが良好に行われるような看護援助が見いだされると考えられる。そこで本研究では、母子相互作用の中でも母親-胎児間のシグナル・反応行動を明らかにすることを目的とした。今回は、その中でも母親からみた胎児の母親に対するシグナル・反応行動を中心に報告する。

### II 概念枠組み

小林の提唱する乳児期の母子相互作用モデルを、妊娠期の特徴を踏まえて修正し、作成した。妊娠期の相互作用は、触角、視覚、聴覚などの感覚系を介して母親は胎児のシグナル・反応行動を受け取り、受け取ったことを通して母親なりに胎児を認知し、それによって母親のシグナル・反応行動が起こると考える。(図1、2参照)

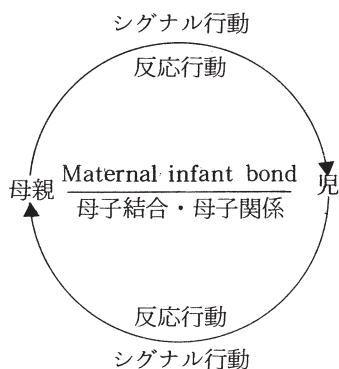


図1. 小林の母子相互作用 mother-infant interaction モデル

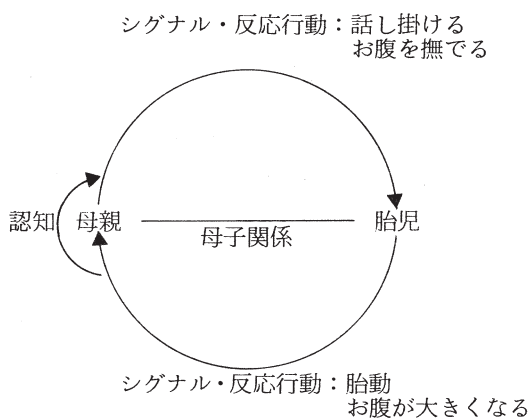


図2. 本研究の母子相互作用モデル

### Ⅲ 研究方法

平成3年7月14日～8月19日に、高知県立C病院産婦人科を訪れた妊婦30名を対象として、半構成的な質問紙に基づいて面接調査を行った。得られたデータを、母親と胎児のシグナル・反応行動に関して質的に分析した。

### Ⅳ 結果および考察

母親からみた胎児の母親へのシグナル・反応行動の構成要素として、〈胎児のシグナル・反応行動を母親が知覚しやすい条件〉〈胎児のシグナル・反応行動の起こる前状況〉〈胎児のシグナル・反応行動の種類〉が得られた。(図3参照)

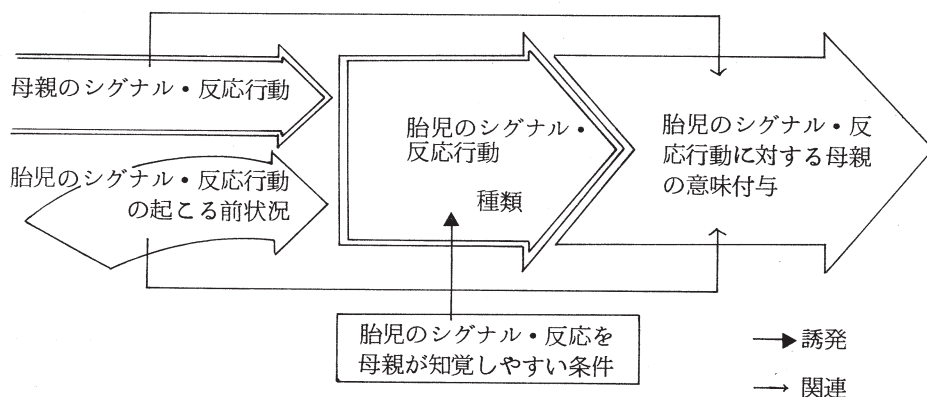


図3. 胎児のシグナル・反応行動

#### (1) 〈胎児のシグナル・反応行動を母親が知覚しやすい条件〉

〈胎児のシグナル・反応行動を母親が知覚しやすい条件〉は、その条件が整うことで母親が胎児のシグナル・反応行動を受け取りやすくなるものである。条件が整えば必ずシグナル・反応行動が起こる訳ではないが、それが無い場合と比較すると胎児のシグナル・反応行動を受け取る母親の感受性が高まる。この条件は胎児のシグナル・反応行動の一段階ではなくその根底に位置付けられる。

この条件には“直接お腹を見ること”“心身がリラックスしていること”“時間的に余裕があること”があった。(表1参照)

表1 胎児のシグナル・反応行動を母親が知覚しやすい条件

直接お腹を見ること
心身がリラックスしていること
時間的に余裕があること

“直接の腹を見ること”は、母親が胎動や腹部の増大など胎児のシグナル・反応行動を視覚的にとらえることができる状態である。このようなとき、母親は胎児のシグナル・反応行動をより容易に知覚することができる。

また“心身がリラックスしていること”は、母親が心身ともに落ち着いて、ゆったりしていることである。このようなとき母親の関心は胎児に向けられ、胎児のシグナル・反応行動を受け取りやすくなっている。

“時間的に余裕があること”は母親に時間的余裕があることで、そのようなときは母親の関心が胎児に向けられ、胎児のシグナル・反応行動により敏感な状態となる。

## (2) <胎児のシグナル・反応行動のおこる前状況>

<胎児のシグナル・反応行動のおこる前状況>は、胎児のシグナル・反応行動の前の段階にあるもので、それを引き起こす原因となるものである。その原因となっているのは、胎児ではなく母親の状況であり、つまりは母親の行動や、身体・精神状態を表している。従ってそれが胎児のシグナル・反応行動を必然的に起こさせている。

この前状況には“胎児が負担であるとき”“母親に身体的負担があるとき”“母親が精神的に不安定なとき”“母親が精神的に安定しているとき”“母親が動いているとき”“母親が空腹なとき”“母親がお風呂に入っているとき”の7つがあった。(表2参照)

表2. 胎児のシグナル・反応行動の起こる前状況

胎児が負担であるとき
母親に身体的負担があるとき
母親が精神的に不安定なとき
母親が精神的に安定しているとき
母親が動いているとき
母親が空腹なとき
母親がお風呂に入っているとき

“胎児が負担であるとき”は母親が胎児にとって苦痛な姿勢・動作をとっているときである。母親はその苦痛が原因となって胎児のシグナル・反応行動を起こさせているとらえている。

二番目の“母親の身体的負担があるとき”は、母親が身体的に無理をして疲労を感じている状況である。

母親は胎児のシグナル・反応行動が起こると、その前の状況を振り返り、自分自身に疲労や苦痛があり、それが原因となって胎児のシグナル・反応行動が起こっているとらえている。

三番目の“母親が精神的に不安定なとき”は、母親は精神的に変化があり安定が保たれていないとき、それが原因となって胎児のシグナル・反応行動が起こっているとらえている。

四番目の“母親が精神的に安定しているとき”は母親が精神的に安定してゆったりしている状態であるが、このようなとき母親は胎児がシグナル・反応行動を起こしているとらえている。

五番目の“母親が動いているとき”は、母親が身体を動かしているときである。母親は、自分の行動が原因となって胎児のシグナル・反応行動を引き起こしているにとらえている。

六番目の“母親が空腹なとき”は、母親自身が空腹なときには胎児も空腹であると考え、胎児がシグナル・反応行動を起こしているにとらえている。

七番目の“母親がお風呂に入っているとき”は、母親が入浴中には胎児も快く感じているため、それが原因となって、胎児がシグナル・反応行動を引き起こしているにとらえている。

母親はこれらの状況と、胎児のシグナル・反応行動が起こった原因を結びつけて考えている。それは、妊娠中は自分の行動や状態が胎児の状態と結びついているにとらえていることと関係している。

### (3) <胎児のシグナル・反応行動の種類>

妊娠期には、胎児を直接見ることができないため、胎児の様子を知ろうとするとき、母親は様々な現象を頼りにしている。胎動だけではなく母親の身体的変化、身体症状なども胎児によって引き起こされている合図にとらえている。それらは胎児の行動と解釈されており、胎児のシグナル・反応行動となっている。

これには、現象が起こったそのときすぐに胎児からの合図として受け取られる〔即時的なシグナル・反応行動〕と、現象の繰り返しや母親の振り返り、以前との比較の結果、胎児からの合図として受け取られる〔長期的なシグナル・反応行動〕があった。(表3参照)

表3. 胎児のシグナル・反応行動の種類

大カテゴリー	小カテゴリー
即時的なシグナル・反応行動	胎動
	つわり
	腹部の緊張
	出血
	空腹
長期的なシグナル・反応行動	腹部の増大
	体重の増加
	つわり
	胸の緊張
	切迫流産の徴候

〔即時的なシグナル・反応行動〕には“胎動”“つわり”“腹部の緊張”“出血”“空腹”の五つがあった。

まず“胎動”であるが、母親は自分の体のなかで胎動を感じると、胎児からの何らかの合図にとらえている。なお、母親は胎動について「動く」という言葉だけではなく、様々に表現している。それらを〔胎動の表現の要素〕としてまとめたので

最後に述べる。

二番目の“つわり”であるが、母親はつわりを胎児の存在や元気の証拠にとらえ、胎児がいるために起こるととらえている。つわりは一般的には妊娠中の生理的現象であるが、母親はそ

れだけでなく胎児がいる、元気であるにとらえていた。つまり、自分の身体的症状ではなく胎児によって引き起こされたものとして受け取っている。

三番目の“腹部の緊張”であるが、母親はそれを胎児からの合図にとらえ、何らかの知らせと受け取っている。客観的にみると、これは母親自身の身体症状であるが、母親は胎児が引き起こす現象にとらえている。

四番目の“出血”であるが、母親にとって性器出血は、何らかの異常の徴候であり、胎児からの緊急度の高い知らせにとらえている。

五番目の“空腹”であるが、母親は自分自身の空腹を、胎児が空腹なため食物を欲しがっているという合図にとらえていた。つまり、空腹を自分自身の生理的現象としてだけでなく、胎児からの要求として受け取っている。

次に〔長期的なシグナル・反応行動〕には、“腹部の増大”“体重の増加”“つわり”“胸の緊張”“切迫流産の徴候”の四つがあった。

まず、“腹部の増大”は胎児の成長を意味し母親はそれを胎児からの合図にとらえている。またこれは、妊娠の経過のなかで腹部の増大を見続け、以前の様子を振り返って比較することで胎児の合図として受け取られていた。

二番目の“体重の増加”であるが、母親は自分の体重増加は胎児がいるために起こった現象で、胎児からの合図にとらえている。またこれは合図となるまでに長期の時間的経過が必要である。

三番目の“つわり”であるが、母親はつわりがなかったことを、胎児が自分にくれたこと、あるいは胎児からの知らせとして受け取っている。またこれは〔即時的なシグナル・反応行動〕の中の“つわり”とは違い、妊娠期を通して現在までつわりが無かったことで、胎児からの合図となっている。

四番目の“胸の緊張”であるが、母親は妊娠中の胸の張りが胎児によって引き起こされるととらえ、それによって体内の胎児の存在を確信している。これは胸の緊張が起こったその時ではなく、徐々に変化があることで胎児からの合図となっている。

五番目の“切迫流産の徴候”であるが、母親にとって切迫流産の徴候は、胎児の生命の危険を意味し症状が続くことを胎児の苦痛にとらえたり、症状があっても流産しなかったことを胎児の出生への意志にとらえている。またこれは、症状の出現したその時に合図として受け取るのではなく、症状が続くことや、症状があっても流産はしなかったことを胎児からの合図としてとらえている。

最後に、即時的なシグナル・反応行動の一つである“胎動”について分析した〔胎動の表現の要素〕について説明する。

胎児のシグナル・反応行動として胎動を挙げた母親は胎動を自覚している母親全員であった。胎動に対する母親の感じ方や表現は様々で、それを基にした胎児の様子のとらえ方は多岐にわたっている。その要素として‘胎児の動作’、‘特徴的な胎動の表現’、‘胎動の程度（頻度・強度・速度）’があった。（表4参照）

表4. 胎動の表現の要素

大カテゴリー	小カテゴリー
胎児の動作	動作
	動かしている部分
	動く位置
	動作の方向性
特徴的な胎動の表現	特徴的な胎動の表現
胎動の程度 （頻度・強度・速度）	胎動の程度 （頻度・強度・速度）

まず、‘胎児の動作’は胎児の動作そのものに関することであるが、胎児を主体として表現した“動作”“動かしている部分”と母親の身体を主体として表現した“動く位置”“動作の方向性”に分けた。

二番目の‘特徴的な胎動の表現’は母親が胎動を擬態語

や比喻表現で表しているものである。母親は胎動を感じたままに忠実に表現しようとしており母親の感じ方に違いがそのまま表れている。

三番目の‘胎動の程度（頻度・強度・速度）’は母親が感じた胎動の回数、強さ、速さを表すものである。これらは全て度合いで表すことができ、母親も様々にそれらの度合いを表現している。これには、頻度・強度・速度のうち一つを表す場合と、いくつかを同時に表す場合とがあった。

以上のように、胎動に対する母親のとらえ方は個別性・多様性が高く、それを基に胎児の様子、健康状態、その他様々なことを想像、解釈、判断している。

## V おわりに

今回は母親からみた胎児のシグナル・反応行動について述べた。本研究の目的は、母親と胎児との相互作用を明らかにすることであった。従って、母親の胎児の行動に対する行動、胎児の母親に対する母親の意味付与が明らかになり、これらの結果から一つの母親 — 胎児の相互作用モデルを作成した。（図4参照）次の機会に、胎児の行動に対する母親の意味付与と相互作用モデルについて報告したいと考える。

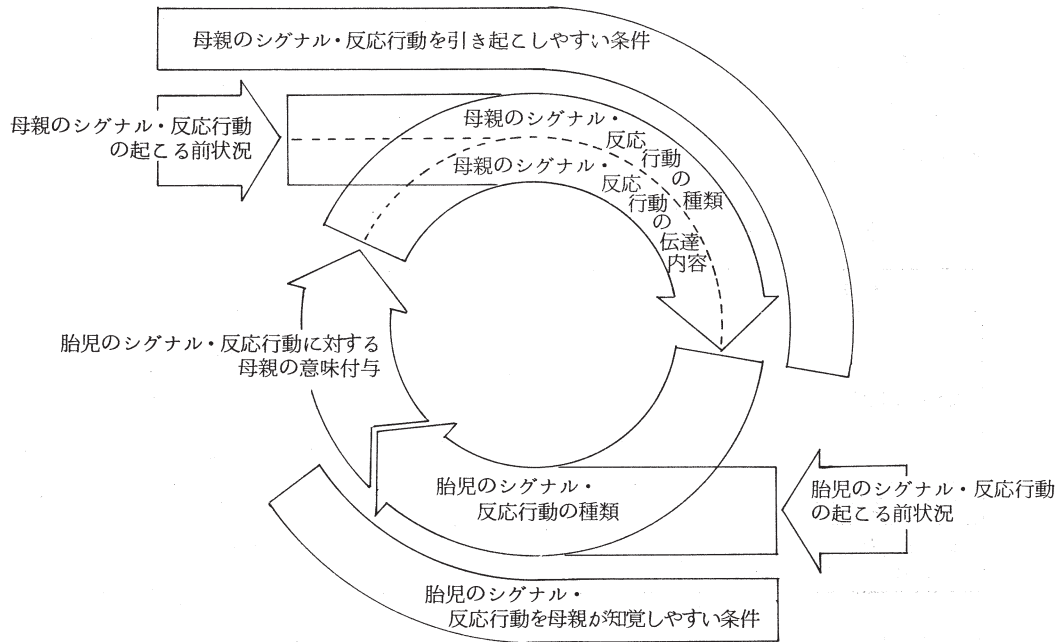


図4. 妊娠期における母子相互作用モデル